

中世における信仰と知

1. 本研究の目的及び背景

キリスト教古代から近世初頭の思想家において、つまりは思想史的に「中世」とされる時代の思想家において、「信仰と知」ないし「権威と理性」の関係をめぐっての思索は、いわば通奏定音のように響き続けている。ジルソン (E. Gilson 1884-1978 年) がその著書 *L'Etude de Saint Augustin* (1929 年) の序説で、信仰から受け取った問題意識に知性が答えていく探求構造を「キリスト教哲学」と呼んだことは周知の事柄である。「信仰と知」の関係が具体的にどのような問題提起のもとで思索されるかは、その都度の思想史的状况によって変わり、またアクセントの置き方は思想家によって異なるが、まさにこの問題意識の諸相を探っていくことこそが「中世哲学史」を辿ることともなり、また人間の精神活動の多様な働き方とその可能根拠を浮き彫りにするという哲学的営為ともなるのである。このように中世哲学全体を俯瞰する視点を「信仰と知」というテーマは我々に与えるのではあるが、しかし本邦ではこれまで、この視点から個々の思想家を辿る論文集は存在しなかった。本研究はそこで『中世における信仰と知』というタイトルのもとに論文集を編集・刊行すること目的に、全国から第一線で活躍する研究者の協力を広く募り、行われているものである。

2. 研究の概要

「信仰と知」の問題は、すでにキリスト教がヘレニズムの思想世界と対峙した時、つまり 2 世紀には、抜き差しならぬ問題として護教論家たちに迫っていた。一つの流れは、ストア派のロゴス論を軸に信仰と哲学の関係を肯定的に捉えるものであった。キリストが神的ロゴスであり、そこから撒かれる種子的ロゴスは人間においては個々人の理性となり、世界においては個々のものの成立原理として調和的世界の原理となっている。それゆえ理性に従って生きた異教の哲学者たちにも真理の一端は理解されており、哲学は信仰の準備段階でありうるが、真の哲学はキリスト教である、とするのである。だが一方で、こうした行き方を「雑種のキリスト教」を造るものとして警戒し、理性的探求が挫折したところから信仰がはじまると主張する向きもあった。しかしこの緊張のなかでキリスト教は、中期プラトン主義また新プラトン主義的体系の積極的受容により——この受容は、ヘレニズム的テキスト解釈の聖書解釈への転用をベースになされた——一なる神の数多的一としての世界創造と世界の神への還帰（救済・完成）という体系的な世界観を構築していく。また、4-5 世紀における三位一体論、キリスト論等の教義確立の努力は、「実体」「本質」等の哲学の基本概念を位格 (persona) 概念や関係概念を通して考え抜くことで、ギリシア的存在論の基礎概念を堅固なものとするという哲学的業績をもたらした。さらに神認識と神についての語り (theologia) の可能性を探求することを通して「否定神学」が打ち出され

る。こうした動きは、9世紀のカロリング・ルネサンス期に、新プラトン主義においてなされていたアリストテレス論理学のプラトンの分有論への組み入れと東方神学の受容を基盤として、精神の弁証法的動勢に基づく壮大な精神形而上学的体系を現出させるに至った。

11世紀に至りラテン中世では、信仰内容から得た問題を「理性のみによって」(sola ratione)によって探求し、信仰内容を理解へともたらそうとする初期スコラ学の形態が成立する。ここにおいて「信仰と知」は、人間精神の自己反省による自立性の認識と、その自立を支える根底への配視という観点から問題とされ始める。12世紀においてこの方向は、瞑想的で情動を重視する修道院神学と、論理学を駆使しつつ都市で活動する知識人の営為へと分離していくが、双方にあって自己反省する「私」という個人の「人格」(persona)が主題化されてきたこと、また後者においてなお人間の論理的思考が神的ロゴスに根ざすものとして理解されていたことは注目に値する。超越の意識への現象から人間精神の自立性を基礎づけるこのような思考は、当時の時代状況にあってキリスト教徒と異教の哲学者および異教徒との対話の地平を開くものともなっていた。

こうした知的状況はイスラム世界を経由してアリストテレス哲学が流入することで転機を迎える。膨大な知識量と堅固な体系性を有するアリストテレス哲学はとりわけその自然学、形而上学、靈魂論でラテン中世を魅了したが、同時に信仰箇条と相容れない命題を巡って甚大な論議を引き起こし、神学者たちは人間靈魂の構造、また自然理性ないし哲学の射程を改めて反省することを余儀なくされた。13世紀の盛期スコラ期の知の制度であった「大学」のなかで「信仰と知」は「学知」(scientia)の問題として捉え直される。すなわち哲学と神学の関係、その遂行能力としての自然理性と恩恵の関わりが主題とされたのである。この問題設定のなかでトマス・アクィナス(Thomas Aquinas 1224/25-74年)は哲学的・自然理性的探求の限界を見定めた上で、哲学と神学、理性と権威の総合的体系を確立した。

しかしこの総合が——「信仰」「神学」の優位性が主張されながら——解体されていく過程が、近代への道ゆきとなる。13世紀後半から14世紀の後期スコラにおける靈魂観の変化——靈魂の主要な働きが抽象から直観へと移行する——に伴い、唯名論および主意主義が醸成され、超越さらには事物の本質の理解可能性が閉ざされる一方で、「信仰」から切り離された「知」は、感覺的認識を通して経験される個物と測定可能な事象間の法則の発見のうちに、自らが機能する地平を獲得していく。これがイギリス経験論および近代自然科学の土台となる。一方で内面化された信仰は、靈魂の——能力以前の——根底における神との直接的な接触を重視する神秘主義を形成する。ドイツ神秘主義は、トマスの「存在の類比」の思惟を徹底化することで被造的存在の神的存在への依存性を強調し、それにより分有者としての被造物の独立的存在性は後退する。魂はそこにおいて神が御子を生み出す場としてのみ成立しており、この場への突破において神の創造と完成の活動のうちに組み込まれていく。内面への立ち戻りとそこから神への上昇はすでにアウグスティヌス(Augustinus 354-430年)において成立していた神秘主義的図式であるが、魂のこの上昇が「魂における神の子の誕生」という神からの下降の出来事に先導されていることが、ここに強く意識されるようになった。そのなかで「信仰と知」の問題は、信仰箇条により知られる神の下降と魂の神への上昇の結節点で生起する自己認識の問題として主題化されていくが、こうした考察自体はドイツ観念論の超越論的自我の問題提起を準備するものとなる。

3. 論文集『中世における信仰と知』

先述のとおり本研究は論文集、上智大学中世思想研究所編『中世における信仰と知』(中世研究第13号)として知泉書館から今年度中に刊行される。十七章立ての本書は、人間精神の根源的な働きである「信」と「知」の相互関係が主題化される諸相を開示すると同時に、「中世」という時代の思索の豊かさと深みを本邦の思想界に改めて認知させることとなる。

以上